様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １６ 日現在

機関番号：３２６０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ００３１７

研究課題名（和文）仮名本『曽我物語』の後期本文の変容とその意味

研究課題名（英文）Transformations and Meanings of the Late Text of the Kana-Bon "Soga Monogatari"

研究代表者
小井土　守敏（KOIDO, Moritoshi）

大妻女子大学・文学部・教授

研究者番号：３０３５２６６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：仮名本『曽我物語』後期本文の最終型としての流布本の本文策定ならびに注釈作業を行った。流布本に基づいて物語年表ならびに諸本記事対照表、物語関係地図を作成して付録とした。また、底本に載る挿絵のすべてを掲載し、その挿絵の解釈や本文との関係性を明示した。また、『曽我物語』を流布本で読み直すことの意味を解説としてまとめた。以上の成果を盛り込み、『曽我物語 流布本』として武蔵野書院より刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
仮名本『曽我物語』の後期本文の最終型とも言える流布本の注釈付き本文提供は、1966年の日本古典文学大系（岩波書店）所収本以来であり、研究成果としての今回の本文の提供は、その間50年余の間の研究の進捗を盛り込んだものとなった。また、昨今重視される挿絵についても、その研究素材を提供し得たものと考えている。こうして各系統のテクストが公刊されることで、『曽我物語』研究の一層の進展が期待される。

研究成果の概要（英文）：I worked on the drafting and annotation of the final version of the kana-bon "Soga Monogatari". I created a story chronology, a story relationship map. I also commented on all the illustrations and discussed the meaning of reading "Soga Monogatari" in the final version. Incorporating the above results, it was published as "Soga Monogatari Rufu-bon".

研究分野：日本中世軍記文学

キーワード：曽我物語　軍記文学　仮名本　流布本

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

『曽我物語』研究は、近時ある種の閉塞感のなかにあった。それを突破しようとする試論として「日本文学研究ジャーナル」11（2019 年 9 月）における渡瀬淳子氏の論考があった。また、「流布本で軍記物語を読む」ということについては、2019 年 12 月に、武蔵野書院の「武蔵野文学」において特集が組まれ、軍記文学における流布本、最終型としての流布本の位置づけを、再考しようという動きがあった。他にも、「軍記物語講座」（松尾葦江氏編、花鳥社）において『曽我物語』が取り上げられたり、説話文学会では、2020 年 4 月の例会において「曽我物語と説話」としてシンポジウムが組まれたりと、学界全体として『曽我物語』研究への気運の高まりがあった。

そうしたなかで、やはり問題となるのは、定本として研究資源になりうる各系統諸本のテキストの策定であった。

２．研究の目的

國學院大學が所蔵する、武田祐吉旧蔵本甲本、いわゆる「武田本」と称される『曽我物語』は、仮名本系伝本群にあって古態性を指摘されながら、そのテキストが深く読み込まれることはなく、その全容が公開されることもなかった。仮名本『曽我物語』研究の進展を阻害するもののひとつとして、信頼に足る本文が提供されていないことが挙げられる。本研究では、仮名本の最終形態となる流布本の本文策定と、仮名本の中間段階となる武田本の本文を策定し、その研究環境を整えること、および、武田本『曽我物語』に全注釈を施すことを目的とする。

流布本の注釈作業を、武田本の注釈への遡及を念頭に行うこととする。仮名本の最終型としての流布本と、中間形態とされる武田本との距離を測ることを目的とする。

本研究の成果として、古態を有する武田本のテキストを公開し、注釈を施すことによって、仮名本『曽我物語』が生成されていった時代の文化や〈知〉の基盤、伝承の交錯といった、成立の環境が明らかになると考えている。それは、『曽我物語』に限らず、中世の軍記文学作品それぞれの本文がどのように変容していったかを解明する一助となるはずである。さらに、副次的に進められる流布本の注釈付き本文についても、公刊の機会を得たいと考えている。

３．研究の方法

(1)　武田本は、これまで翻刻が行われていない本文であるので、まず本文の翻刻、確定を行う。第一次本の太山寺本と、第二次本の円成寺本との異同をとり、本文の関係について再検証する。これは、村上学氏に先行研究があるが、先行論の検証と共に、注釈作業の基礎資料として、隣接するテキストとの校異を取っておくことが必要であると考えるからである。

(2)　武田本の注釈は、語彙・語法・史実との照合・他文献（他作品）との重複の有無などを主として指摘することとする。かつその注釈は、単なる語釈の域にとどまらず、歴史的・地理的観点から、また、芸能等の文化史的観点も盛り込んで、武田本の本文が生成された環境、背景を明らかにしようとするものである。

(3)　流布本については、これまでにある程度の翻刻・校訂作業を進めているが、あらためて正保 3 年版の版本と照合し、流布本本文を確定させる。異同をとる対照としては、太山寺本、彰考館本、南葵文庫本、古活字本とし、太山寺本（一次本）との相違箇所に注意を払いながら作業を進める。太山寺本と大きく事なる部分については、武田本との要照合箇所とする。

(4)　流布本の注釈は、十行古活字版を底本としている日本古典文学大系所収『曽我物語』（岩波書店、1966）に準ずるものとし、必要最低限のものに留める。武田本の注釈に遡及できる部分を洗い出しながら進める。

４．研究成果

武田本の本文策定ならびにその本文の注釈を施すことが本研究の目指すところであり、その

作業過程で副次的に流布本の注釈作業が可能であるというのが当初の計画であった。

武田本の翻刻作業は完了したものの、該本が持つ本文の問題は複雑多岐にわたることが明らかとなり、武田本の本文の位置づけやそのすべてに注釈を付すには、もう少し時間を要すると判断した。そこで、武田本の注釈への遡及を念頭に置きながら、まずは流布本の本文策定と注釈をまとめることとした。最終形態としての本文を確定し、その注釈作業を行うことを通して、一次本（太山寺本）からの継承と乖離を明らかにすることとしたのである。

その成果として、『曽我物語 流布本』を武蔵野書院より刊行した（2022 年 9 月）。『曽我物語流布本』には、底本に載る挿絵に対をすべて掲載し、その挿絵の解釈や本文との関係性を考察して記載した。また、流布本の記述に基づいて、物語年表ならびに諸本記事対照表を作成し、同じく流布本の記述に基づいた物語関係地図を作成した。さらに、「『曽我物語』のおもしろさを今ふたたび」と題して、『曽我物語』を流布本で読み直すことの意味を、解説としてまとめた。後期本文の最終型である流布本の注釈付き本文の提供は、1966 年刊の日本古典文学大系（岩波書店）所収本以来であり、その間の研究の進捗を盛り込んだものとなったと考えている。

流布本の注釈作業を通して、いくつかの論考も発表した。

「馬芸を誇る語り―流布本『曽我物語』注釈ノート―」（「人間生活文化研究」№31、2021 年 3 月）では、馬術の描写が初期仮名本から後期仮名本へと潤色がすすむさまを検証し、その本文変化の中で武田本の位置についても考察を加えている。

「仮名本『曽我物語』年譜考」（「大妻国文」№53、2022 年 3 月）においては、後期仮名本が年月日の記載をあえて曖昧にすることで、人物造型への影響を企図していることを論じた。これらは、武田本を起点とする潤色、物語の劇化（劇文学化）という、あらたな研究課題へと繋がることとなった。

また、“注釈”という営みを考えるために、『平家物語評判秘伝抄』の輪読会を開始し、その翻刻資料を公開した（「人間生活文化研究」（International Journal of Human Culture Studies）№32、2022 年 11 月など）。

本研究助成の期間に、2020 年度能楽学会第 19 回大会シンポジウム「曽我兄弟の伝承と能―歴史・物語・芸能―」（2021 年 3 月 13 日、オンライン開催）のパネリストとして、「『曽我物語』改作の指向―真名本・仮名本―」と題した報告を行った。その報告と全体討議の内容は、『能と狂言』№19（2021 年 11 月）において論文化した。

また、2021 年 4 月説話文学会／軍記・語り物研究会合同例会シンポジウム「『曽我物語』と説話」（2021 年 4 月 24 日、オンライン開催）では司会を務め、シンポジウムをまとめた。その概要は、「説話文学研究」№57（2022 年 9 月）に文章化した。

さらに、『曽我物語 流布本』の刊行までの作業は、2023 年度中世文学会春季大会シンポジウム「デジタル時代の本文校合」（2023 年 5 月 27 日、白百合女子大学）でのパネリストとして、「デジタル資料の利活用―『曽我物語』の注釈作業を通して―」の報告へと繋がることとなった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 小井土守敏	４．巻 53
２．論文標題 仮名本『曽我物語』年譜考	５．発行年 2022年
３．雑誌名 大妻国文	６．最初と最後の頁 107-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小井土守敏	４．巻 19
２．論文標題 『曽我物語』の改作の指向―真名本・仮名本―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 能と狂言	６．最初と最後の頁 13-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小井土守敏	４．巻 31
２．論文標題 馬芸を誇る語り ―流布本『曽我物語』注釈ノート―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 人間生活文化研究	６．最初と最後の頁 29-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小井土守敏	４．巻 52
２．論文標題 『曽我物語不審問答』について	５．発行年 2021年
３．雑誌名 大妻国文	６．最初と最後の頁 87-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小井土守敏，楠瀬由夏，小川あかり	４．巻 32
２．論文標題 〈翻刻〉『平家物語評判秘伝抄』（１）	５．発行年 2022年
３．雑誌名 人間生活文化研究	６．最初と最後の頁 666-707
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小井土守敏，楠瀬由夏，小川あかり	４．巻 33
２．論文標題 〈翻刻〉『平家物語評判秘伝抄』（２）	５．発行年 2023年
３．雑誌名 人間生活文化研究	６．最初と最後の頁 101-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 小井土守敏
２．発表標題 『曽我物語』の改作の指向―真名本・仮名本―
３．学会等名 能楽学会（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計2件

１．著者名 小井土守敏	４．発行年 2022年
２．出版社 武蔵野書院	５．総ページ数 484
３．書名 曽我物語 流布本	

１．著者名 笹岡政宏編	４．発行年 2022年
２．出版社 ホビージャパン	５．総ページ数 127
３．書名 曽我物語　源氏をめぐる陰謀と真実	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関